

絵本『シベリアのバイオリン：
あなたに贈る物語』
窪田由佳子(文) 多田つむぎ(影絵)
地湧社 2024.12



とても読みやすい。幼児向きではないが、絵本である。著者の窪田由佳子さんが父親の抑留体験を五年前小説にした『シベリアのバイオリン：コムソモリスク第二収容所の奇跡』（2020）=右書影=を若い世代にも伝えたいと、影絵を高校3年生の多田つむぎさんに協力してもらい出来た本だ。絞りぬいた文章と影絵が素晴らしい。

若い頃『アーロン収容所』会田雄次著を読み、敗戦後、日本人が捕虜となり収容された歴史を知っていたのが、抑留問題に関心を持つきっかけだったのかもしれない。そして三年前、中学生の孫が映画『ラーゲリより愛を込めて』を観て「面白かった」といった言葉が追い打ちをかけた。映画の原作の『収容所から来た遺書』辺見じゅん著を読んでいた頃、旧友がシベリア抑留者の慰霊祭を行う事を知り手伝いをする事となった。



自然、この問題に詳しい方々との交流から様々な知識を得られた。昨年は『命の嘆願書』の著者井手裕彦さんとラジオ等で対談することもできた。そして安藤会長からこの本の感想を書く依頼を頂いた。収容所と音楽。興味深く読めた。

あらすじは、音楽好きの少年がバイオリンと出会うところから始まる。戦時中のため日本では自由に練習できないと家族の反対を押し切って十七歳の時に満州へ向かう。やがて召集され戦争末期に侵攻してきたソ連によりシベリアへ抑留される。

抑留のなかでバイオリンを手作り

極寒・飢餓・重労働の過酷な日々、潤いを求め

てバイオリンを手作りする。抑留体験者の手記を読んで感心させられるのはここである。道具など何もない処で工夫をして、例えば鉛筆代わりに消し炭を使ったり、折れたノコギリの刃で木を削ったりする。それと比べると、溢れる物に囲まれている現代人は知恵や工夫が劣るような気がしてしまう。やがて収容所内に楽団ができ、演劇団ができる。小説では収容所生活の厳しさが子細に語られているが、この絵本では少ない。つらい気持ちにならずに読めるのも良かった。

巻末に、「ロシアの人々は暖かくて、いい人達だった」という言葉が出てくるが、今のプーチンのウクライナ侵略を見るとその言葉に違和感を持ってしまう。一般のロシアの人々は、きっとそうなのだろう。悪心を持つ権力者を憎みたい。

戦争は決してしてはならない。しかし俗な言葉だが、仕掛けられて負けると酷い目に合う。極めて寂しいことだが、大国に有徳な指導者が見当たらない今、日本の安全に不安を覚える。頼りなく見える今の政治家達に日本は守れるのかと薄ら寒い気がする。

ポーランドの人達との友好を大切にするわが協会の姿勢を誇りに思う。同時に多くの日本人がわが協会の形を真似て多くの国々の人たちと温かな交流をされることを願いたい。（三田剛己、会員）



李恢成さん追悼 長屋 のり子

あの衝迫は忘れられない。あの喜びは忘れもしない。二〇〇七年(と記して今更のように私は驚く。あれから十八年もの歳月が流れたのだ。光陰が私に過ぎたのだ!)の秋のとある日、まぎれもない李恢成さんがあの端正なお貌で我が家の海に向くお玄関に立っていらした。はっとするほどの長身の偉丈夫、美丈夫でいらした。風除室から更にもうひとつドアを開けて既にまさに降臨!といった風になにこやかに、まるで十年の知己の親しさで其処にいらした。

その頃小樽の丘陵の我が家のもうひとつ上の家にロシア文学の工藤正廣さんが仮住まいをなさっていて、彼との待ち合わせ場所に我が家が指定されたものらしい。二階のリビングに昇る途中の階段脇の本棚に立花隆、村田喜代子、中沢新一のコーナーに並んで十数冊の李恢成コーナーのあるのを目聡(ごとく)見つけられて「おう!」とその遭遇に歓声をあげられた。足をとめてご自分の本を取り出されて「『見果てぬ夢』に此处で会うとは感激以外の何ものでもないなあー」と心底真



底親しい表情でもう一度しげしげと老いた文学少女の顔を、とりわけ眼をまっすぐに凝視(みつ)められた。無垢な喜びようでいらした。あの瞬間、私と李恢成さんとの間にある種の清潔堅固な信頼が芽生えたような気がする。一瀉千里すみやかに私達は打ちとけた。李恢成さんは眼下の日本海に歓声をあげ、広い窓を褒め、飾られた絵を賞め、私達の生活調度の全てを触ったりとりあげたりして感に堪えないという風に全く素直に賞賛して下さった。

やがて工藤正廣さん、新宿書房の村山さんが揃って、私はその日有頂天で、なりきりレヴィ=ストロースで自慢気に野生の思考を語り、“プリコラージュ”を得々と語った。李恢成さんは眉をひそめるでなくおおらかにそれを聞いてくださっただけでなく、その後、斧をかついで大きな長靴で山を降りて来る夫を裏窓からの視界に捉えるや「おっ! プリコルールがやってくるよ、まさに彼は森番メラーズといった風じゃないか!」と快活に仰有った。さすれば私はチャタレー夫人! 悪くない! 家で森番メラーズを加えて二時間ばかり海を愛でたあと、人嫌いの夫を家に置いて私達四人はその頃経営に携わっていた堺町の「多喜二」という寿司屋に繰り出してふんだんに寿司を摘み思う存分に日本酒を空けた。午後八時を過ぎる時間からは、広い大正元年創築の特別室での接待だったので、自由気儘に振舞い、椅子の席を降りて部屋の壁に背を預けて床に足を伸び伸び投げ出して放縦好き放題の話題に興じて深夜まで話し込んだ。

それが李恢成さんとの最初の出逢いで、いきな

り十時間の余に及んだと思う。稀有な忘れられない世にない素晴らしい豊熟の時間だった。今思い出しても恍惚陶然とする。友人の作家(宮内勝典)にその日の様子をそのあと微に入り細に亘り報告すると「分かるよ、寛容の人なんだ。僕なんか新進の時代からどのくらいお世話になったかしれない。今では僕がこうしてまがりなりにも大学の客員教授をやっていて当時より随分ラクに暮らしているのに、今でも何処で飲んでも食べても磊落(らいらく)に奢ってくださるし帰りがけには一万円札を渡して下さって、タクシーで帰らなきゃあ駄目だよって労われつづけている。小説は一字一句ノミで彫り込む、刻み込むように大事に書かなきゃ駄目だ、と僕みたいに不器用な寡作の作家を鼓舞擁護しつづけて下さるんだ」と大きく肯いていたことも、余談ながらつけ加えておこう。その優しい人となりに触れ直す意味でも。

我が家の李恢成コーナーに、その先はずっと彼の恵贈本が増えつづけたことは言うまでもない。真に美しい書跡の署名(サイン)が添えられて。

人の死はいつも唐突にやってくる。その李恢成さんがこの一月五日、誤嚥性肺炎で亡くなった。悲しみにくれながら私は書棚の彼のコーナーからまず『砧をうつ女』を取り出して精読を始めている。その初々しい精悍緻密な文章にあらためて打たれつづけている。人は逝くものだと知りつつも、ご逝去の悲痛、悲傷とまらない。

(ながや・のりこ、詩人、会員)



『KA』という体験 渡会 やよひ

昨年 2024 年は私にとって画期的な年でした。ヴェリミール・フレーブニコフの叙事詩『KA』発行に携わることができたからです。フレーブニコフ(1885-1922)はロシア帝国に生まれ、各地を放浪、36歳の若さで客死した詩人ですが、数々の実験詩を発表、ロシア・アヴァンギャルドの領袖とも呼ばれ、伝説と謎に彩られた詩的生涯を送りました。

『KA』を初めて目にしたのは、敬愛する北海道出身の詩人、支倉隆子さんの個人誌『ALL ん私記』77号(2020)でした。最初の出だしは〈私にはkaがいた〉でした。私はこのkaという突然の呼び名に惹きつけられ、〈kaは魂の影であり、分身であり〉(kaには時間の関所がない。kaは眠りから眠りへ歩み、時間をよこぎって青銅時代にたどりつく)と続く、ただならぬ言葉にびっくりしました。その言語の斬新さイメージの美しさ、残酷と奇想に夢中になりました。

『KA』は2023年の94号まで連載されて終わりました。『KA』の日本語訳は支倉さんが初めて試みられたということで、まとめて冊子にして読むと、その言葉に驚愕しながらも、意味を追おうとすると先に

進めない状態に何度もおちいりました。そのとき私は『KA』が名うての難解な詩集といわれることを思い出しました。思えば支倉さんの名訳がまず私を魅了したともいえるでしょう。

それから一年後、支倉さんと親交のある小樽の長屋のり子さんから支倉訳『KA』発行の企画があるとお聞きしました。支倉さんと詩劇などで交友のある東京近郊の詩人たち、佐波ルイ、金井裕美子、木内ゆかさんなどが携わり、なんと私も北海道組として仲間に入れてもらえることになりました。それからの数カ月、熱くて冷たく、麗しくて狂おしい『KA』の原稿が、ゲラが、メールで、郵便で、何度行き来したのでしょうか。私はおもに校正を手伝わせて



いただきましたが、編集の過程で、難解なところ、判別の難しいところは長屋さんが直接、支倉さんご自身に電話で確認することもしばしばでした。そして横長、横書き三十数頁の本文が出来上がり、表紙を決める段階になり、長屋さんが出版社から色見本を取り寄せ、支倉さんご主人で画家の川瀬裕之さんといろいろ案を練ったのもスリリングで興味深いことでした。

こうして、編集・佐波ルイで阿吽塾から12月発行のめどがついたころ、『KA』発行に大きなサプライズがありました。なんと、巻末に名古屋外国語大学学長でロシア文学の泰斗であられる亀山郁夫先生に解説「フレイブニコフ『カー(Ka)』に寄せて」を

書いていただけることが決まったのです。また、北海道大学名誉教授で北海道ポーランド文化協会会長の安藤厚先生には解題「支倉隆子とフレイブニコフ」として、キャンパス時代を含めた詩人支倉隆子像を書いていただけることになりました。人生をロシア文学研究に捧げてこられたお二人の重厚で意義深い文章を拝読して胸がいっぱいになりました。両先生には史実の検証や校正の誤りもご指摘いただき、感謝の念は尽きません。

長年、細々と詩を書いてきた私の『KA』体験は、今まで知ることのなかった新たな詩の世界を体感することでもありました。フレイブニコフの詩はあまたの宝石を隠した漆黒の岩山のようなので、これからその鉱脈をハンマーでコツコツと掘り当てていきたいと思っています。(わたらい・やよひ、詩人)



会員動向 (2025.1~3)

逝去:佐々木保子さん(2025.3.1 没、謹んでご冥福をお祈りします)
 入会:住谷秀保、高松菊乃、退会:吉田邦子 (敬称略)

ご寄付 (2024.12~25.3) 深謝!

(1口千円)(5)関口時政(2)高橋健一郎、石田レイ子
 (1)長田佳宏、野村信史、支倉房子

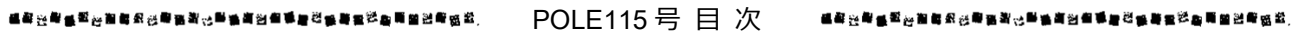
年会費 (2024.9~25.8) 納入のお願い

年会費の納入をよろしくお願ひ申し上げます。

年会費:一般3,000円、学生1,500円 また、維持会費としてご寄付(1口千円:任意)も承ります。

※未納の方へのご請求額は個別の納入依頼(振替用紙同封)をご覧ください

- ◆ゆうちょ銀行振替口座【記号】02740 5【番号】19735【加入者名】北海道ポーランド文化協会
 (他銀行からの送金の場合) 店番(279) 預金種目(当座) 店名(二七九[ニナナキユウ]店) 口座番号(0019735)
 - ◇北洋銀行(本店営業部) 普通預金口座【店番号】028【口座番号】0605084【名義】ホッカイドウポーランドブ
 ンカキョウカイ ※「北洋銀行アプリ」を利用すれば、北洋銀行口座間の送金手数料は無料
- ※遠方の方はご寄付(年千円)で会誌 POLE の定期読者になることもできます。事務局にお問合せください



POLE115号目次

《第115回例会》ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2025-2『水の中のナイフ』5/8(池田光良)..... 1
 《第116回例会》講演&上映会「ポーランドと日本:新渡戸稲造とポーランドの偉人たち」6/10..... 2
 《第114回例会》報告 ポーランド名作映画ビデオ鑑賞&交流会2025『イーダ』(池田光良)..... 4
 〈新会員のひと言〉「ポ文協」に入会して(樋口みな子) さっぽろ雪まつり第49回国際雪像コンクール..... 5
 〈新刊紹介〉『ジェロムスキ短篇集』(前田理絵) 『いまは、ここがぼくたちの家:ウクライナから戦争を逃れてきた子ども』(先川信一郎、熊谷敬子)..... 6
 ヴィスピャンスキ作、津田晃岐訳『婚礼』に触れながら(田村和子) 展覧会 若きポーランド~色彩と魂の詩 1890-1918..... 8
 〈新刊紹介〉『クラクフ:書くための本』(齊藤賢人) 追悼佐々木保子さん(小林暁子)..... 9
 〈新刊紹介〉絵本『シベリアのバイオリン:あなたに贈る物語』(三田剛己) 李恢成さん追悼(長屋のり子)..... 10
 『KA』という体験(渡会やよひ)..... 11

	発行 北海道ポーランド文化協会	ポーレ編集委員会
	〒060-0018 札幌市中央区北18条西15丁目3-19 安藤方	安藤厚/池田光良
	TEL・FAX 011-556-8834, mail: hokkaidopolandca@gmail.com	熊谷敬子/越野誠
東京事務所 〒107-0052 東京都港区赤坂9-6-29-309 音響計画(株) 霜田気付	TEL 03-6804-1058 FAX 03-6804-6058	